

第3回 西東京市農業振興計画策定委員会 議事録

日時：平成14年10月4日（金） 午後2時～4時30分

場所：西東京市役所田無庁舎 503 会議室

出席者：〔委員〕深澤 司（委員長）、小田切猪佐夫（副委員長）、荒木俊光、原島義夫、中谷行雄
 鶴野文夫、蓮見伸一、鈴木一成、桜井正行、藤澤龍造、浜 昱子、吉川秀則
 〔事務局〕長谷川課長、尾林主幹、松川課長補佐、東原係長、坂本主査
 若山、小野（地域計画研究所）

委員長挨拶

前回議事録確認

異議なし

農家意向調査の結果について（資料 - 1 の説明：地域計画研究所）

主な意見

発言者	発言内容
鶴野	バブル期は、宅地化移行が広がったが、現在は農地維持が多い。援農については、労働力に見合った経営にしたい人は考えていない。病気やケガをしたときの労働力として、手伝ってほしい人はいる。年間を通じてという人は少ないのではないかと、市民の皆さんからみてどうか。
委員長	収入の面ではどうか。専業ではないのか。
浜	不動産と合わせて農業をやっている人が多い。サラリーマンと兼業している人も入っている。
委員長	農業だけで生活している人は少ない。それだけでは生活できないのか。
藤澤	今回の調査では、体を動かして農作業している人は、農業を仕事としてとらえている。しかし、10a以下の農家は、それだけではやっていけない。
委員	農家意向調査の問19（P.26）の援農については、「特に必要がない」が43%とは、思ったより多い。
吉川	援農を希望する農家が少ない。
委員長	作目別でみるとわかるのではないかと、植木、造園はどうか。
中谷	植木関係は、手伝うこともないので、問7の農畜産物をクロスして結果をみたい。
原島	援農については、年輩者の農家は、昼食やお茶などを出す手間があると考えているのではないかと、今回のアンケート結果は、予想通り、60代以上の回答者が多いので、このような割合になっていると思う。若い人の回答を見ないと、対応できない。若い人は違うことを考えていると思う。
桜井	若い人の援農に対する考え方は違うと思う。援農に対する理解が普及していないこと、回答者の年代が高いことから、このような回答が出て仕方がないと思う。現状では、特に年輩者は援農に対するきちんとした理解がない。ボランティアに来てもらっている人は少ないので、普及すれば、援農を求める農家も出てくるのではないかと、
鈴木	仕事のない人に、安く来てもらえれば、農家も助かるのではないかと、
蓮見	70代以上の方が、農家をやっているということは、不動産収入がなければ、生活していけないということである。子どもは、一流企業の部長等を勤め、その人達が定年後になると農業をやるといふうにしないと、市内の農地を守っていけないのではないかと、

発言者	発言内容
荒木	むしろ、「援農が必要ない」という回答が43%は、少ない気がした。杉並区では、「援農はいらぬ」という農家が80%である。
藤澤 副委員長	援農で成功しているところはあるのか。 援農のやり方は様々である。草取り程度ではなく、一緒になって農業をやっているところが多い。国立では、体が悪い人より、農業をしっかりやっている人の方が、援農を受け入れている。
桜井	西東京市での援農は、公民館活動の一つとして実施したのものが、現在までつながっている。
委員長 鵜野	問6(P.7)の男女比率はどうみるか。 女性の労働時間をどこまで考えるかで答えが違ふ。農作業と家事をやっているところは、労働力として回答していないかもしれない。
委員長	問7(P.8)で、第2位の無回答が多いのは、露地野菜のみのところが多いということか。
中谷	問7(P.8)露地野菜や施設野菜という表現は年配者にはわかりにくいいため、無回答が多いのではないか。

市民意識調査の結果について(資料 2の説明:地域計画研究所)

主な意見

発言者	発言内容
鵜野	問2(P.3)では、「農地を残してほしい」という意見が多いので、税制面の優遇などにより、宅地化ではなく農地を残す方法を検討したい。
藤澤 委員長	問4(P.5)の「農薬を使わない、環境に配慮した農業」については、農家全体が興味をもっていると思う。 農薬は、一年に何回撒いているのか。 農林規格には、農薬ごとに、年に何回撒くか、収穫の何日前まで撒いてよいか等の規定が定められている。
荒木	農薬を使う際には、収穫物を洗わないで食べても大丈夫なように、濃度や回数を決めている。
鈴木 長谷川	農業体験については、中学校の授業の一環として農家にも依頼がきている。 学校から産業振興課に授業の一環である職業体験のひとつとして、中学生に農業体験をさせたいという依頼が来るので、農家を推薦しているが、双方とも喜んでる。
桜井 副委員長	総合学習の一環ということで、農家が協力できないか聞き取り調査等にもきている。 都は今年度から総合学習にともなう体験農園も制度を動かしている。種まきから収穫まで毎週体験する。
吉川 鵜野	子どもの農業体験等は、ぜひ行なってほしい。 地元で農家と市民が知り合うことが大切。地域の運動会の賞品に農産物を出す、もちつき大会で地元の野菜を使ったトン汁を農家と一緒につくってもらおう等して市民に喜んでもらった。
委員長	問3(P.4)農業・農地についての意見で、「土ぼこりなどで困る」とあるが、西東京市の場合は、生産緑地が多いので、あまりないと思う。物納された土地を、農地と誤解している場合が多いのではないか。
鵜野	物納農地は、まわりに迷惑をかけている。一般の農地は葉境期や残さを出したままにしていることを指摘していると思う。物納農地は表示が必要ではないか。
長谷川 鵜野 若山	管財人の連絡先は表示されている。 それだけでは、通る人にはわかりにくい。 梅や栗がもったいないという意見がでている。

発言者	発言内容
委員長	問9 (P.10) の直売所利用状況で「たまに利用」「週1回」というのは、少ないとみてよいのか。回答者に勤めている人が多いことを考えると、多いのではないか。
副委員長	自由回答1. 農作物に対する要望 野菜の値段・品質についての意見 (P.31) に、直売所の農産物について批判的があるが、直売所にも競争原理が必要であり共同直売所も検討してはどうか。農家の所得を上げていくためにも、ニーズに応えられるものを作っていくことが大事である。
藤澤	西友に農家直送の野菜が置いてあるのを、よく見かける。売れているのか。
桜井	売れているが、品目数が少ない。
吉川	無人でお金を置いていく方法は、買いにくい。インターホン等で農家の人を呼ぶとか、コミュニケーションがとれると利用しやすい。
委員長	これについては両方の意見があり、農家の人がいると買いにくいというお客もいる。
蓮見	昔は、いくら置いていってもよいというやり方をしていたので、その名残りである。農業委員会では、対面販売するように指導している。
藤澤	農家の玄関先に直売所があるとよい。また、共同直売所を考えたらどうか。買いやすいのがよい。
委員長	有人は必要だと思う。しかし、農家の仕事との両立は難しい。駅で夕方5時から8時頃まで販売しているところがあり、売れている。JRも多角経営で試みている。
吉川	ドライブがてら、花園の直売所まで買いに行くこともある。
委員長	共同直売所の問題点は、駐車場である。何人かが共同で販売する方法もある。
吉川	朝市は行なっているのか。
鶴野	昔はやっていた。今もレタスやトマトは朝採りなどがある。
中谷	東村山でも朝市を行なっているが、場所の問題があり、売れきれない。
委員長	直売は、余ると困ってしまうことが問題である。
鈴木	直売所がない時代は朝市をやったが、今は直売所が100箇所くらいある。
委員長	空き缶、空き瓶の投げ入れの問題はどうか。幹線道路沿い以外の農地でも投げ入れはあるのか。
中谷	うちの敷地も、毎週同じ場所に捨てられている。
鶴野	近くに自動販売機があるので、石積みの塀に置いていく。
桜井	お弁当の容器なども捨ててある。
委員長	モラルだけではダメ。千代田区のポイ捨て条例のようなものが必要である。八丈島は、島内でやっている。デポジットの運動をしないと難しい。
桜井	生ゴミの堆肥化を試みている。成分検査したところ、問題ないということで始めている。西東京市の剪定枝を使えば、地域循環になる。注意点は、不純物が入っていると、そのまま出てくるので、西東京市の生ゴミと決めている。地域内循環をできるように、しっかりやらないと。
委員長	農家の人には素手で作業するので、ガラス等が危ない。
副委員長	抗生物質などの薬やボタン電池(カドミウムなど水銀が危険)が危ない。農薬より多くて、目に見えないので困っている。特に集合住宅は、責任感が希薄になる。
桜井	成分検査もしている。現状では、問題ないが、いろいろな問題が生じる可能性もあることは、十分承知している。
委員長	横浜市は冬になると体温計に含まれる水銀が出るらしい。
鶴野	検査結果で問題がなくても、毎年使用していると、土壤に蓄積するのではないかと。慎重に行う必要がある。
桜井	まだ初めて3年だが、一応、土壤も検査している。今のところ問題はない。
荒木	処理物を直接投入すると、大失敗する。牛糞と混ぜるより、剪定枝のチップと生ゴミの方がよいようだ。
鶴野	輸入品のグレープフルーツなどは、なかなか腐らないので、心配な面もある。
桜井	そのくらい注意しないと心配だ。畑はゴミ捨て場ではない。優良資源と考えている。いずれにしても、難しい問題である。
委員長	大規模になると、問題が増える。直売所の範囲とか、小さい単位のほうがよい。

市内及び先進事例視察の検討について

主な意見

発言者	発言内容
委員長	現地調査については、特に反対はないということで、内容については、事務局に一任したい。特に市民委員の皆さんに見ていただけるスケジュールがよい。時間を考えると、3ヶ所をゆっくり回るのがよいのではないか。今回は特殊な事例ではなく、一般的な西東京市の経営を見ていただき、また、練馬区の体験農園は参考になるので見るとよい。

次回の会議日程について

平成 15 年 1 月 15 日 午後 2 時から

また、11 月末又は 12 月に団体ヒアリングを行い、課題を整理する。